

講義の風景

総合政策学部

スティーブン・R・リード教授

Reed, Steven R

「現代政府論」

[月曜1限]

月曜1限。学生にとつてはなるべく避けたい「ゲツイチ」の授業。そんな時間でありながら楽しく学べる魅力的な授業を見つけた。「現代政府論」、総合政策学部スティーブン・R・リード教授による授業である。

《スティーブン・R・リード 米インディアナ州生まれ。ベトナム戦争当時に兵役の関係で来日、九

州の地で奥様と知り合い結婚。帰国後ミシガン大学大学院で、比較政治学について研究、その後ハーバード大学、アラバマ大学などで教鞭をとる。愛娘1人。中央大学総合政策学部の開設とともに中央大学勤務。かつては二つの立場（独裁と民主）を演じながら授業を行ったり、試験問題をサイコロで確定したこともあるなど、ユニークな授業に学生達から人気が高い》

教科書ではなく電子テキスト

流暢な日本語で政治論

教室には早めに入る教授

「イギリス小選挙区制と

二大政党制」

1限、しかも月曜日の、となればそれなりの気合がある。授業開始10分前に行くと、もう何人かの生徒が

座っていた。一番後ろの席に座り、しばらくするとリード教授も入ってきた。教授は早めに来るタイプらしい。白髪、眼鏡、淡いグレイのスーツに白いシャツ。教壇の上をゆっくり歩きながら授業開始時間を待ち、見知った生徒がいるのか時折、にこにこしていた。

授業は、各国の選挙と政党、政策を中心とした戦後政治史を通じて、日本、イギリス、ドイツ、イタリアの四つの国の民主主義を比較・評価

教科書代わりの「電子テキスト」
小選挙区制の特徴をグラフで説明

授業が始まってすぐ、教授は「電子テキストを印刷してきましたか？」と学生に向かつて問いかけた。この授業では普通に教科書を買うのではなく、教授から電子テキストが提供され、自分で印刷してくることになっているのだ。本とは違い、自身は常に改善されていく。日本的に全部覚えるべき、というテキストではなく、アメリカ的に資料として考える、というのが教授の考え方だ。

授業が始まって10分。この頃までに遅れてきた生徒がばらばらと入ってきて、だいたいの席が埋まった。さて、本格的に講義の開始である。

イギリスの選挙制度といえば、小選挙区制である。国全体を小さな選挙区に分けて、それぞれの選挙区から一人、最も票の多い候補者が当選するという制度だ。日本も94年に衆議院選挙に小選挙区制を導入してい



身振りを交え、流暢な日本語で

る。

この選挙制度の特徴は、政党の得票率と議席率が必ずしも一致しないことにある。大きな政党、特に第一党にとっては、議席率が得票率を上

回ることになって有利で、小さな政党、特に第三党以下の政党にとっては、議席率が得票率を下回ることになって不利なのだ。ここで教授は黒板にグラフを書き始めた。

小選挙区制と対照的な比例代表制は得票率に比例して議席をもらえるから、グラフは直線になる。しかし、小選挙区制は、得票率40%を超えたあたりから急にぐんと議席率が伸び、曲線のグラフを描く。得票率が40%でも議席率は60%になったりするのだ。しかし、反対に得票率が低い場合、例えば10%の時に議席はゼロになってしまう場合もある。

政権担当能力ある政党を育成 与党は政策遂行の「責任」負う

「こうすると2つの政党しか生き残れないですよ」と教授。

小選挙区制を採用することで、二大政党制が生まれる。そういえば先日、の参院選のニュースを思い出して見ても、焦点を当てられていたのは自民党と民主党の対決だった。

確かに小政党にとつて不公平といえば不公平である。しかし、イギリスでは「育成すべきは政権担当能力のある政党」という考えなのだ。このような制度を採ることによって残るのは「政権担当能力のある政党」

で、第三党以下に議席を与える必要はないことらしい。

リード教授は教壇の上を行ったり来たりしながら、学生に向かって語りかける。熱心に身振り手振りを交え、しっかりと力強い話しぶりは朝イチの授業でほんやりした頭をしやきっとさせてくれる。

「イギリスでは実は小選挙区制は人気ないんですけど、政府は国民の考えはどうでもいい」

なぜなら第一党は特に得をするからだ。小選挙区制なら票が過半数に届かなくても、確実に過半数の議席を取れる。「イギリスの与党が考えているのは『国民の考え』じゃない、『責任』です」と教授。

『国民の考え』より『責任』とはどういうことなのだろうか？ここで教授は「ウェストミンスター民主主義」という言葉を紹介する。「私力タカナ嫌いなんですよ。カタカナは日本語でも英語でもない。やめたほうがいい」。そう言いながら教授は

英語で「Westminster」と黒板に書いた。こうしたところに教授のはっきりした考えがのぞく。

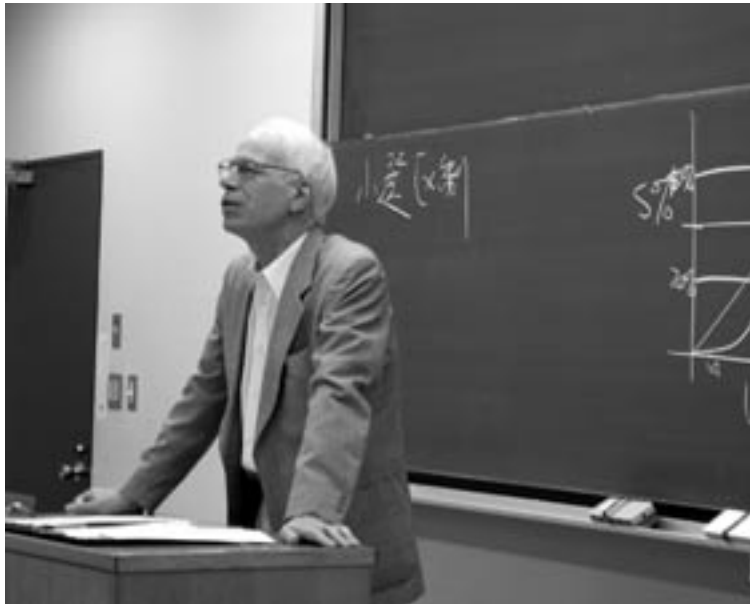
この記事上ではカタカナで失礼するが、「ウェストミンスター」とは、日本で言う「永田町」のこと。イギリスの政治は「ウェストミンスター

型民主主義」と呼ばれている。

「ウェストミンスター型民主主義」

発言権なく、
次の選挙待つだけの野党

ウェストミンスター型民主主義は、
教授曰く「与党1つ、野党1つ、与



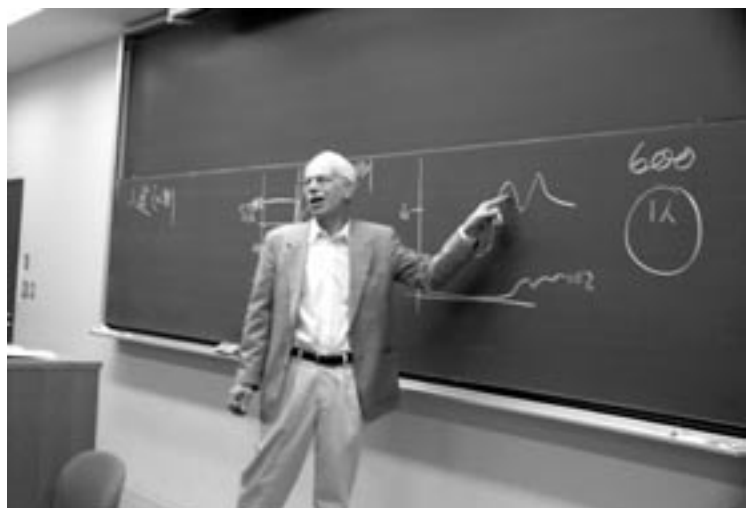
イギリスの小選挙区制とは

野党の発言権はない！」というもの。野党にできることは内閣の打ち出した政策に反対し、次の選挙を待つことだけ。一方の与党は独裁に近い形で、世論、野党の反対を気にすることなく自らの政策を進

めていくことができる。

同じ議院内閣制とは言え、日本とはずいぶん違うようだ。「日本の国会は、時間をかけ、徹底的に議論することが正しいとされているからね」と教授。なるほど日本では安倍晋三前政権が強行採決を連発したとき、「まだ議論は尽くされていない！」と野党が反論したり、マスコミで「議論不足では」と取り上げられたりしていたのを思い出した。

また、最近ニュースで騒がれている日本の年金問題についても「日本では誰の責任か採めているが、イギリスではそんなことはありえない。当然与党の責任になる」そうだ。イギリスの与党は政策を自由に実行していく代わりに、その責任も明確に



グラフを書いて、分かりやすく解説

されている。選挙になれば政権の業績から逃げられないし、有権者に業績を評価されなければ、政権交代となるのだ。
小選挙区制はとても政権交代しやすい制度である。40%の得票率でも60%の議席を得ることができる。少



学生に問い、考える力を

し票が増えるといつきに議席が増える。つまりイギリスの制度ははっきりした責任と政権交代にあるのだ。

イギリスの評価は？と学生に問う

流暢な日本語で時折冗談も

一通り話し終わり、教授は「今日の話聞いて、イギリスの評価は上がりましたか？下がりましたか？」と生徒に聞いた。こうやって各授業ごとに各国を日本と比較して評価していくのだ。

評価が「上がった」と答えた学生は8人、「下がった」と答えたのは13人だった。「上がった人は何が好きだったの？」と教授が問いかける

と、一人の学生が手を上げて「少なくとも『実行する』と約束した政策は実行するという点では、日本より良いのではないか」と答える。

「それが間違った政策でも？イギリス政府は国民の過半数が反対したイラク戦争でも実施しますって言ったよね」と教授。学生側が「うー

ん・・・」と混乱してしまうと、教授は「言わせるつもりじゃないから大丈夫。考えさせるつもりでした」と笑顔になった。

「イギリスは間違っても実施した方がいい、という考えなんですわね。イギリスのやり方が良いというわけではないんです。どちらにも良いところも悪いところもある」ということで、今日の講義はここまで。

驚くのは流暢な日本語。時折冗談をまじえた分かりやすい話しぶりのおかげで小難しい政治制度の話もすんなり聞いた。朝イチにリード教授の授業で元気をもらい、しゃっきり目を覚ますのは良いかもしれない。

では、と見知った学生と談笑する先生を置いて教室を出た。しかしエレベーター前で待っている私の横を、教授は颯爽とすりぬけて階段を降りていった。学生の私がエレベーターなのに・・・少しシヨックである。

（学生記者 八並恵理子Ⅱ法学部3年）